『世説新語』に於ける王羲之と郗愔及び許詢との関係

塚本　宏

はじめに

王羲之（307？～365？）は、字は逸少、琅邪臨沂（山東省）の人。官名により王右軍（右軍将軍）と呼ばれた。

羲之を育んだ王家は、当時の貴族としては名門で、謝家や郗家と肩を並べる家柄であった。そして、これらの王家、謝家、郗家は、東晋時代の代表的な貴族で、各々が各自の家を守護しつつ、積極的に先頭に立って東晋王朝を支援し、前進させていかなくてはならない運命にあった。

六朝時代南朝の宋の劉義慶（403～444）によって編集された『世説新語』（以下略して『世説』と称す）には、全編の小話総数一一三〇話（登場人物は延べ七八八名）の逸話が盛り込まれている。その『世説』中での羲之の存在は、〈表1〉にあるように、小話数は十一番目に位置付けられている。

また、唐の太宗の勅撰による『晋書』巻八〇には、本伝、即ち羲之の事蹟及び足跡、そして人柄などが詳しく論じられている。

特に有名なエピソードとされる彼の結婚が決められたときの場面を、『世説』の雅量第六19から引用すると、

郗太傅（郗鑒）京口（江蘇省）に在り。門生をして王丞相（王導）に書を与え、女壻を求めしむ。丞相郗の信に語ぐ、「君東廂に往きて、意に任せて之を選べ」と。門生帰り、郗に白して曰く、「王家の諸郎亦た皆嘉す可きも、来たりて壻を覓むと聞き、咸自ら矜持す。唯だ一郎有り、東牀の上に在りて坦腹して臥し、聞かざるが如し」と。郗公云う、「正に此れ好し」と。之を訪えば、乃ち是れ逸少なり。因りて女を

〈表1〉

順位	登場人物	小話数
1	謝安（320～385）	一一四話（一〇・一％）
2	桓温（312～373）	九四話（八・三％）
3	王導（267～330）	八七話（七・七％）
4	劉惔（？～？）	七五話（六・六％）
5	庾亮（289～340）	五八話（五・一％）
5	司馬昱（320～372）	五八話（五・一％）
7	王濛（309～347）	五七話（五・〇％）
8	殷浩（？～356）	五〇話（四・四％）
9	支遁（314～366）	四九話（四・三％）
10	王敦（266～324）	四六話（四・〇％）
11	王羲之（307～365）	四五話（三・九％）
12	王衍（256～311）	四二話（三・七％）
13	王戎（234～305）	三六話（三・二％）
14	周顗（269～322）	三四話（三・〇％）
14	桓玄（369～404）	三四話（三・〇％）

嫁して焉（これ）に与う。

とある。また、これと同じ内容の逸話が『晋書』巻八〇に次のようにある。即ち、

時に太尉郗鑒、門生をして女壻を導（王導）に求めしむ。導は東廂に就きて徧く子弟を観しむ。門生は帰りて、鑒に謂ひて曰く「王氏の諸少、並びに佳なり。然れども信の至るを聞きて、咸な自ら矜持す。惟だ一人、東牀に在りて坦腹して食し、獨り聞かざるが若し」と。鑒曰く「正に此れ佳き壻なるか」と。之を訪へば乃ち羲之なり。遂に女を以て之に妻す。

とある。この両者を比較すると、最初の部分の説明が『世説』のほうが詳しい。後半はほとんど同じであるが、要は、郗鑒は自分の娘である璿に誰かよい壻を王家から欲しいと考え、東晋の丞相であり王家の首領である王導に頼んだのである。そこで王導は自分で行動せずに郗家の門生に「東廂に行って好きなように選びたまえ。」と任せてしまった。ところが、その壻選びの情報は王家にすでに伝わっていたのか、王家の若者たちは皆よく見てもらおうと外見をかっこうよくして、きちんと威儀を正して居た。しかし、一人だけベッドに腹ばいになったままで何かを食べながら、何も耳に入らぬ様子の無様（ぶざま）な若者が居た。門生は見たそのままを郗鑒に報告したら、郗鑒は「その無様なのがよい。」と言われた。後で問い合わせてみると、なんとその男は王羲之であったというエピソードである。時に羲之十八歳頃といわれる。

本稿で扱う郗愔は、この逸話中の郗鑒の長子であり、羲之の嫁に決った璿は郗愔の妹であるから郗愔は羲之の義兄である。父の郗鑒（269～339）は、字は道徽、金郷（山東省）の人。東晋の司空、太尉を歴任したので、郗太尉、郗太傅、郗司空、郗公などと呼ばれた。

郗愔（313～384）は、字は方回、金郷の人。東晋の臨海太守、天師道を信仰して政務を怠り、章安（浙江省）に隠棲し、その後再び仕え、平北将軍、会稽内史、司空となった。

また、本稿で扱うもう一人の許詢（生没年不詳）は、字は玄度、幼時の字は訥。魏の侍中、尚書、中領軍の許允（？～245）の玄孫。許詢は東晋の司徒掾に召されたが就任しなかった。清談の名手であったが夭折した。

（以上、人名解説については、『世説』人名解説、藤堂明保監修、竹田晃訳、（学習研究社）による。以下も同じ。）

一

本稿は、王羲之と郗愔及び許詢の関係についての論である。また、今までのこの類いの論文は、羲之と『世説』の逸話中の登場人物との関係を中心に論じたもので、シリーズとして扱ってきた。今までの登場人物と今後の登場人物についての論文題目をまとめておくと次のようになる。

1　王羲之と王献之及び謝安（一九九九年）
2　王羲之と支遁（二〇〇〇年）
3　王羲之と王導（二〇〇一年）
4　王羲之と王敦及び庾亮（二〇〇三年）
5　王羲之と殷浩及び劉惔（二〇〇五年）
6　王羲之と郗愔及び許詢（二〇〇六年）…本稿
7　王羲之と郗超及び王献之（二〇〇七年）
8　王羲之と王述及び謝万（二〇〇八年）
9　王羲之と孫綽及び王脩（二〇〇九年）
10　王羲之と王濛及び王恭（二〇一〇年）
11　王羲之と桓玄及び周顗（二〇一一年）

また、『世説』中の小話数及び羲之の小話に登場する各自の小話数についてまとめると〈表2〉のようになる。即ち、この表において、「各自の小話」の中に、「羲之の小話」は何話入っ

〈表2〉

順位	登場人物	小話数	順位	登場人物	小話数
1	謝安	10（22.2%）	7	王敦	3（6.7%）
2	阮裕	5（11.1%）	7	殷浩	3（6.7%）
3	劉惔	4（8.9%）	7	王胡之	3（6.7%）
3	支遁	4（8.9%）	12	謝万	2（4.4%）
3	王導	4（8.9%）	12	王濛	2（4.4%）
3	庾亮	4（8.9%）	12	郗愔	2（4.4%）
7	許詢	3（6.7%）	12	王述	2（4.4%）
7	孫綽	3（6.7%）	16	諸葛恢	1（2.2%）
			（以下省略）		

〈表3〉

順位	登場人物	各自の小話数	羲之の小話数	関係率
1	阮裕	13	5	38%
2	郗愔	10	2	20%
3	許詢	20	3	15%
4	王述	17	2	12%
5	謝万	20	2	10%
6	孫綽	32	3	9.3%
7	王脩	11	1	9.0%
8	謝安	114	10	8.7%
9	支遁	49	4	8.1%
10	庾亮	58	4	6.9%
11	王敦	46	3	6.5%
12	王胡之	16	1	6.2%
13	殷浩	50	3	6.0%
14	劉惔	76	4	5.2%
15	王導	87	4	4.5%
16	郗超	27	1	3.7%
17	王献之	28	1	3.6%
18	王濛	57	2	3.5%
19	王恭	29	1	3.4%
20	桓玄	34	1	2.9%
20	周顗	34	1	2.9%
22	司馬昱	58	1	1.7%

ているかということから、羲之と各々の人物との「関係率」が算出できる。その関係率から見ると、第一位が阮裕で、十三話（自分の小話）中に五話に羲之が登場するということで、三十八%という関係率が算出される。以下、同様に見ていくと、〈表3〉のようになる。郗愔は十話中羲之の小話が二話なので関係率は二位の二〇%、許詢は二〇話中羲之の小話が三話なので関係率は三位の一五%となる。

〈表4〉『世説新語』の中の郗愔と許詢

(注) 小話欄の数字は小話の番号、☆印は羲之が登場する小話を示す。

巻	篇名	小話数	郗愔の小話	許詢の小話
上巻	徳行第一	47話		
上巻	言語第二	108	59	☆69・73
上巻	政事第三	26		
上巻	文学第四	104		38・40・55・85
中巻	方正第五	66		
中巻	雅量第六	42		
中巻	識鑒第七	28		
中巻	賞誉第八	156		95・111・119・144
中巻	品藻第九	88	24・☆29	50・54・☆55・61
中巻	規箴第一〇	27		☆20
中巻	捷悟第一一	7	6	

夙慧第一二	7		
豪爽第一三	13		
容止第一四	39		
自新第一五	2		
企羨第一六	6		
傷逝第一七	19	12	
棲逸第一八	17		13・16
賢媛第一九	32	☆25	
術解第二〇	11	10	
巧芸第二一	14		
寵礼第二二	6		4
任誕第二三	54		
簡傲第二四	17	15	
排調第二五	65	44・51	
軽詆第二六	33		18・31
仮譎第二七	14		
黜免第二八	9		
儉嗇第二九	9		
沙侈第三〇	12		
忿狷第三一	8		
讒険第三二	4		
尤悔第三三	17		
紕漏第三四	8		
惑溺第三五	7		
仇隙第三六	8		
合計 36篇	1,130話	10話	20話

なお、〈表4〉は『世説』の中の郗愔と許詢の小話をまとめた表で、小話欄の数字は各小話の番号を示し、☆印は王羲之が登場する小話である。

さて、郗愔は、『晋書』巻六十七において、

愔、字は方回、少くして交競ならず。弱冠にして散騎侍郎に除すも拝さず。性は至孝にして、父母の憂に居り、殆んどまさに性を滅ぜんとす。服は闋（なく）なり、南昌公を襲爵し、徵（め）して中書侍郎を拝す。驃騎何充（292～346）政を輔け、征北将軍褚裒（303～349）京口を鎮する。皆愔を以て長史と為す。再び黄門侍郎に遷し、時に呉郡の守闕なり、愔を以て太守と為さんと欲す。愔自ら以へらく、資望少なりと。よろしく超へて大郡に莅（のぞ）むべからず。朝議之を嘉す。轉じて臨海太守と為る。弟の曇の卒に會ひ、益々世に處る意無し。郡に在りて優游し、頗る簡黙せんと稱す。姉の夫の王羲之と高士許詢は並に邁世の風を有し、俱に心を、穀を絶って棲しめ、黄老之術を脩む。

後に疾を以って職を去り、乃ち宅を章安に築き、終焉之志有り。十許年間、人事は頓絶す。

簡文帝政を輔る時、尚書僕射の江彪等と輿に愔を薦て、おもへらく、徳を執り正を存し、識は沈敏を懐く、而も職を辞し榮を遺れ、不抜之操有り。務を成すには才を須ゆ。豈にその獨善を遂るを得んや。よろしく徴引せられて以て政術に参らしむべし。ここに於いて徴して光禄大夫と為り、散騎常侍を加え、既に到て、更めて太常に除すが、固く譲りて拜せず。深く沖退を抱き遠郡に補わんことを樂しむ。これに從ひて出て輔國將軍、會稽内史と為す。大司馬桓温は愔と徐兗と故義有るを以て、乃ち愔を遷して徐兗青幽揚州の晋陵の諸軍事に都督とし、徐兗二州の刺史を領せしめ假節とす。藩鎮に居ると雖も、其の好に非ざるなり。俄に桓温の北伐するに屬ひぬ。愔は所部を督して河上に出んと請ふ。其の子超が計を用ひておもへらく、將帥の才に非ず。軍旅に堪えず。又、固辞して職を解き、温に勸めて己が統る所を并せ領し、冠軍將軍、會稽内史に轉ず。帝の踐祚するに及ぶに就て、鎮軍都督浙江東五郡軍事を加え、これに久しふして年老たるを以て骸骨を乞ふ。因て會稽に居り徴して司空に拜し、詔書優美にして敦將殷勤なり。固辞して起たず。太元九年に卒す。時に年七十二、侍中司空を追贈し、謚して文穆と曰ふ。三子超、融、沖、超

最も名を知らる。

とある。また、郗愔について要点をまとめる意味で『中國人名大辭典』を見ると、

鑒の子。字は方回。性は至孝なり。憂に居るも性を滅するに殆く、爵は南昌公を襲ぎ、臨海太守を拜す。優游簡默にて邁世之風あり。後に疾を以って職を去る。尋に復た徐兗二州刺史を徴領す。年老を以って歸を乞ふ。徴して司空を拜すが起たず。卒して文穆と謚す。

とある。郗愔は孝行者で、自分のことを後にして親に尽した。南昌公の爵位を襲いで、臨海太守を拜命した。彼は優游簡默で邁世の風があった。後世になって病を理由に辞職したが、また徐兗の二州の刺史を拜領した。そして、その後、年をとり辞して故郷へ帰ることを希望し司空のすすめがあったが受けることなく、太元九年（384年）に卒した。七十二年間の人生であった。

さて、王羲之と郗愔との関係を『世説』において見ると、〈表4〉にあるように、二人の接点とされる小話は☆印の二話である。即ち、郗愔の小話は全体で一〇話であるから、郗愔の全体の二〇％に羲之が登場していることになる。その二話とは

(1)　品藻第九――29

(2)　賢媛第十九――25

である。そして、「品藻第九」の「品藻」とは、「しなさだめ」

の意で、「識鑒第七」と「賞誉第八」の両篇と同様に人物批評に関する話題を集めた篇であるが、この「品藻第九」は特に人物についての比較論評が多く集められていて、興味深い篇である。

それでは、先ず品藻第九29から見ていくと、

郗司空の家に傖奴有り。文章に知及し、事事意有り。王右軍、劉尹に向かって之を称す。劉問う、「方回に如何」と。王曰く、「此れ正に小人の意向有るのみ、何ぞ便ち方回に比するを得ん」と。劉曰く、「若し方回に如かざれば、故より是れ常奴のみ」と。

とある。この小話の内容は、郗愔の家の北方出身の優秀な下僕とその主人である郗愔自身との人物比較論である。万事に対して心配りが見られる秀れた下僕を、羲之がほめたことに対して「主人の郗愔と比べてどうか」という、両人を比較する返事が劉惔から出された。即ち、羲之がほめたことについての返答ではなく、郗愔を比較の対象として出されたので羲之は少々面喰ったのであろう。そのために下僕への見方が、「正に小人の意向有るのみ」と変わってしまい、「どうして軽々しく郗愔と比べることができよう」と、はじめの言動、即ち、下僕をほめたときの心理状態とは変わっていることに問題がある。また、劉惔は羲之の問いの内容を無視し、そして取り違えて、「郗愔にその下僕が及ぼないとすれば、やはり平凡な下僕（常奴）だ」と言切っている。即ち、羲之は「下僕と郗愔とは軽々しく比較できない」と言っているのに、劉惔は「郗愔に及ばない下僕だとすれば、やはり平凡な下僕だ」というとらえ方をして、問題のとらえ方に食い違いがある。そもそも、郗愔と比べることはできないという羲之の主張に対して、「郗愔に及ばないとすれば」という劉惔の返答は、もう既に二人を比較して結論を出しているのである。これは、お互いに会話が成立していないととるべきなのか、それとも羲之が郗愔に対して気を遣いすぎているのであろうか。しかし、この会話のやりとりを単純に筋だけをとらえれば、羲之が下僕をほめたことに対して、劉惔は結論的には単なる平凡な下僕にすぎないという返答であるから全く筋が通っていないということではないが、その間に郗愔を比較の対象として介入させたことに問題があるのであろう。

さて、羲之が登場するもう一つの郗愔の小話は、賢媛第十九25である。即ち、

王右軍の郗夫人、二弟、司空と中郎に謂いて曰く、「王家二謝を見れば、筐を傾け屣を倒にするも、汝が輩の来たるを見れば、平平たるのみ。汝復（ま）た往くを煩わすこと無かる可し」と。

とある。羲之の妻、郗夫人は前述の序文でも触れたが、郗鑒の

娘で名は璿、字は子房。郗愔と郗曇の姉である。「二弟」とは司空即ち郗愔と中郎即ち郗曇の両人である。郗曇（320～361）は、兄の愔とは七歳違いで、字は重熙、全郷（山東省）の人。東晋の徐兗二州刺史、没後に北中郎を追贈されたので中郎と言われる。「二謝」は謝家の二人、即ち、謝安と謝萬の兄弟である。謝安（320～385）は、字は安石、陽夏（河南省）の人。四十歳になってから桓温（312～373）の司馬となり、以後、侍中、吏部尚書、尚書僕射、録尚書事、太保などを歴任し、東晋王朝では欠くことのできない人物であった。建昌県公に封ぜられ、没後は太傅を追贈された。弟の謝萬は、字は萬石、陽夏（河南省）の人。東晋の撫軍従事中郎、予州刺史、散騎常侍を歴任した。

二弟と二謝との違いは、郗家と謝家との違いであり、自ずと世間の見る目もあり人々もわかっていることである。王家についても当然のことであり、その違いについては自然と対応の仕方にあらわれているのがこの小話の内容である。しかし、羲之夫人の郗璿にしてみれば、自分の郗家の弟たちが二謝よりも優遇されてないというその状態を見せつけられれば、たまらない気持になるのは当然である。そして、結論は「汝復（ま）た往くを煩わすこと無かる可し」と。即ち、「もうあんな所へ二度とわざわざ出かけることはない」という強い気持の入った言い方である。これは郗家の娘としてのプライドであろう。また、「筐を傾け屣を倒にす」とは、普通では考えられないことをやってしまい、あわてふためいて大騒ぎしている王家の人たちの様子がよく表現されている。しかし、郗家の二弟に対しては別に何の変化もなく、いつもの通り平気でどこ吹く風という王家の人たちの態度には、きっと怒りにも近い気持を押えていたのであろう。この璿の気持はわからないことはない。家風や家柄の違い、王家との付き合い方の深さの違い、璿は羲之の嫁という立場で、身内であるということと他人との違いなどが考えられる。

王家から見た郗家と謝家との違いについては、この小話でよくわかるが、郗愔と郗曇の二弟に対しては姉として熱い眼で見守っている様子もまたよくわかる。二弟の姉としての威厳が伝わってくる小話でもある。また、璿は郗家を守ろうとしてこのような強い言い方をしたのであろうが、しかし、謝家との差はどうにもならないということを王家の嫁になって身をもって感じているのであろう。

二

それでは、次に、羲之が登場していない郗愔の小話について触れてみると、先ず、品藻第九24に

卞望之云う、「郗公の体中に三反有り。上に事うるに方にして、下の己に佞（へつら）うを好む。一反なり。身を治むること清貞

にして、大いに計校を脩む。二反なり。自ら書を読むことを好みて、人の学問するを憎む。三反なり」と。

とある。東晋の尚書令であった卞望之が、郗愔には性格上三つの矛盾点があると指摘している。一つ目は、目上に仕えては筋を通すくせに、目下の者が自分にへつらうことを好むこと。二つ目は、自分の身を治めるのに潔癖で曲がったことが嫌いなくせに、一方では大いに計算高くてごまかすこと。そして、三つ目は、自分は読書好きなくせに人が学問することをいやがるという、以上三つの矛盾である。これを述べた卞望之（281～328）は、名は卞壼、字は望之。冤句（山東省）の人。東晋の尚書令として王導とともに成帝を補佐したが、蘇峻の反乱で戦死した。

人の性格は、生き方や考え方によっていろいろと矛盾がある。それは自分自身にとって気が付かないことが意外と多い。郗愔のこの三つの矛盾も自分では気付いていないのであろう。第一の目上と目下に対しての態度の矛盾、これは実に醜い行為である。とかく政治家など、上に立つ人物に多いのではないだろうか。目上にも目下にも同じように筋を通して方正であって欲しいが郗愔は平等に公平にできないのであろうか。また、第二の矛盾は、自分には潔癖で正しいが、他人に対しては計算を細かくしてごまかす人柄、口先きで正当性を論じる人ほど意外とごまかしや不正があるのかもしれない。そして、第三の矛盾は、自分では読書を好みながら他人が学問することを憎む。これは他人が郗愔以上に物知りだったり、学問についてはいつも自分以下であって欲しいと思う人間的に狭い性格ということであろうか。これらの三つの矛盾は、羲之にはほとんど見られないと思うが如何であろうか。或は似たような矛盾は人間だからあるかもしれない。今後の研究課題でもある。

次の捷悟（しょうご）第十一6には、郗愔とその子息の郗超（336～377）と大司馬の桓温（312～373）との問題を含んだ小話が見られる。「捷悟」とは「悟りがはやい」という意味で、勘が鋭く頭の回転がはやい人たちの逸話を集めた篇である。この小話は、郗愔の子息によって手紙が書き変えられ、郗愔が願っていたこととは正反対の道へ方向転換させられた内容である。即ち、

郗司空、北府に在りしとき、桓宣武、其の兵権に居るを悪む。郗、事機に於いて素より暗く、牋を遣わして桓に詣り、方に共に王室を奬め、園陵を脩復せんと欲す、と。世子（せいし）嘉賓出でて道上に行き、信の至るを聞き、急ぎ牋を取る。視竟（おわ）りて寸寸に毀裂し、便ち廻還して更めて牋を作り、自ら陳ぶ、「老病にて人間に堪えず、間地を乞いて自ら養わんと欲す」と。宣武　牋を得て大いに喜び、即ち詔して公を督五郡・会稽太守に転ず。

とある。親子の間でこのようなことがあってよいのであろうか。

郗超の親を思う気持からこのような行動が生まれたのであろうか。それとも大司馬の桓温の幕下に居た郗超としては、立場上このような手紙の書き変えは止むを得なかったのであろうか。結論的には子息郗超の書き変えた手紙によって桓温を大喜びさせたのであるが、郗愔の本心は全く違っていたのである。郗愔が書いた本当の手紙は、

(1)　お互いに協力して王室を輔けること。

(2)　歴代の天子の陵の地を奪回したい。

という前向きの内容であった。その手紙を桓温より先きに読んでしまった郗超は、「視竟（おわ）りて寸寸に毀裂し」とある。即ち、「その手紙をこなごなに引き裂き」、そして、あらためて手紙を書き直し、郗超自身の判断で、

(1)　わたし（郗愔）は老齢かつ病弱であること。

(2)　わたしは閑職を頂いて養生したい。

と、全く反対の内容に変えてしまった。これを受け取った桓温は大喜びで、ただちに詔勅を頂き閑職と言われる会稽太守に郗愔を転任させたのである。桓温は、郗愔がいつまでも兵権を掌握する地位にあることを快く思っていなかった。また、郗愔は生来世間の事態の動きをはやく察知するという点で鈍かったので、郗超は父の手紙を書き変えて桓温に送ったのである。

子息の郗超ができすぎているからか、彼の頭の回転がはやく、桓温との間を自分なりにとりつくろうと思っていたからであろうか。まさに「捷悟篇」にふさわしい内容であるが、多忙の第一線から身を引くことになった郗愔は、実力者桓温の思う通りに兵権を奪われてしまったのである。子息の郗超はそれで後悔はなかったのであろうか。厳しい戦国の世を生き抜く親子の一つの考えさせられる姿であろうか。親を本当に思う息子の心という善意の考え方がこの内容からできるのであろうか。

次の傷逝第十七であるが、「傷逝」とは「死者をいたむ」という意味で、親しい人や肉親を失った悲しみは人の心を深く打つものである。この傷逝第十七12は、郗愔の子息である郗超の死についてである。この死は郗愔にとって複雑な疑念を抱かざるを得なかったようであるが、生前の郗超の行動を考えるとやはり親不孝の人生だったのであろうか。そして、郗超の死は一体誰が最も悲しみ慟哭したのであろうか。小話を見ていくと

郗嘉賓　喪し、左右郗公に白（もう）す、「郎　喪す」と。既に聞きて悲しまず。因りて左右に語る、「殯時道（い）う可し」と。公往きて殯に臨み、一慟して幾ど絶えんとす。

とある。死因は何であるかは不明であるが、郗超の人生は四十二年間であった。同時代（79年から433年までの間で『世説』に登場した人物で生没年が明らかな人物）の156名の平均年齢を調査してみると、五四・八歳であるから、郗超は当時としては短

かいほうである。

なお、この小話の劉孝標の注は、『中興書』と『続晋陽秋』を引用している。『中興書』から見ていくと、

超は年四十二、愔に先じて卒す。超の交わる所の友は皆俊乂なり。死の日に及んで貴賤誄を為す者は四十餘人なり。

とある。また、『続晋陽秋』には、「郗超の一派は桓温を謀反の頭(かしら)とした。父の郗愔は王室に忠誠であったので、父にその謀反のいきさつは何も知らせなかった。超は小さな文箱を作り門生に渡して言った。『もともとこれは捨てようと思っていたが、父は年をとり悲しみのあまり倒れてしまうであろう。私の死後、もし父が寝食を欠くようであればこの文箱を見せてくれ』と。そして、超の死後、父の愔は死を悲しんで慟哭し、病にかかったので門生は超が言ったように文箱を開いたら、その中には桓温とやりとりした密書があった。愔はこれを見て大変怒って言った。『あんな奴はもっと早く死ねばよかったのだ』と。その後はもう二度と哭泣しなかった。」とある。父に「もっと早く死んでしまえば……」などと言われる息子ほど親不孝で悲しいことはない。生前には桓温の謀反のことは何も言い出せなかった彼の父に対する気持はどのように解したらよいのであろうか。謀反のことはたとえ父親であろうと絶対に他言はできない。親子のきずなよりも桓温との間の方を重んじた郗超の生涯だったと言うことになる。彼が小さな文箱を作り門生に托したことが父に対する唯一の慰めだったのであろうか。

次に、術解第二十であるが、「術解」の「術」とは、楽律、天文、暦数、占卜、医術、相馬、相宅などの技術の意味である。自然の理法と人事の動向の解明に技術と見識を発揮した人たちの逸話がこの「術解篇」には収められている。それでは術解第二十10を見ていくと、

郗愔　道を信ずること甚だ精勤なり。常(かつ)て腹内の悪しきを患うも、諸医療(いや)す可からず。于法開の名有るを聞き、往きて之を迎えしむ。既に来たり、便ち脈とりて云う、「君侯の患う所は、正に是れ精進太だ過ぐるの致す所のみ」と。一剤湯を合わせて之に与う。一服して即ち大いに下り、数段許りの紙の拳大(こぶしだい)の如きを去る。剖(さ)きて看れば、乃ち先に服せし所の符なり。

とある。

当時、道教の信者の間では病気を治す為の一つの治療方法として護符を飲み込むことが行なわれた。これは単なるまじないであり、飲み込めば病気が治ると信じられていたのである。その飲み込んだ護符が腸にたまり拳大もの大きさになり、水薬を使ってそれを体外に出したのである。きっと道教の信仰が深い人ほどこのような病気が起るのであろう。

また、医者の代理を勤めた于法開は仏教僧で、于法蘭の弟子である。仏教の教義の解釈で名をあげたが、後に支遁と競った結果、会稽の剡県（浙江省）に隠遁し、あらためて医方占筮を学んだ名僧である。

于法開が言う「精進はなはだ過ぐる」とは、道教に対する信仰が深いので、それだけ護符を多く飲み込んでいるということを今までの経験から判断したのである。即ち、この程度のことならいつもの水薬を使って下痢をさせれば治るというデーターに基いてのことである。劉孝標の注としては『晋書』を引用している。「ある宿の主人の妻がお産なのに何日たっても生まれない。于法開は、これは簡単に治ると言って、一匹の肥えた羊を殺しその肉を十きれ食べさせて針を打つと、たちまち子が生まれ、羊の脂に包まれて出てきた。その医術の精妙さはこのようであった。」とある。

次は、簡傲第二十四であるが、「簡傲」の「簡」は人に対する態度がぞんざいであること、「傲」はおごりたかぶり相手を無視することである。対人関係に於いて世俗的な礼や常識や権威を捨てて、自由奔放にまた傍若無人にふるまった人々の逸話を集めたのが「簡傲篇」である。

この簡傲第二十四15は、王羲之の七番目の息子である王献之の非常識極りない態度を描いている。即ち、

王子敬兄弟　郗公を見るに、履を躡（ふ）みて問訊し、甚だ外生の礼を脩む。嘉賓の死するに及びて、皆高屐を箸け、儀容軽慢なり。坐を命ずるも、皆云う、「事有り、坐するに暇あらず」と。既に去り、郗公慨然として曰く、「嘉賓をして死せざらしめば、鼠輩敢えて爾せんや」と。

とある。ここで問題になるのは、郗愔の息子の郗超の生前と死後に於ける献之兄弟の態度の違いである。生前は礼を十分に尽くして、郗愔に会うときは履（くつ）をはいて挨拶したが、死後は高下駄をつっかけてきて、郗愔があがってゆけと声をかけても「用事があってあがってゆく暇がない」と傲慢な態度である。この両方の違いは何が原因かと探ぐると、郗超は盛名があり桓温の幕下であってかわいがられていたので子の郗超の為に郗愔を敬ったのである。献之兄弟は郗超が有名だったから父の郗愔を敬ったが、いざ死んでしまうとそれほど有名ではない郗愔に対しては礼を尽さないで高下駄に変えてしまったのである。献之兄弟のはっきりとしたものの考え方であり行動であり、それが郗愔の目前でできるということは傍若無人以外の何ものでもない。献之兄弟は冷たいと言えば冷たいが、合理的だと言えば合理的である。父親の羲之とは違うところである。

次の排調第二十五の「排」は、「排斥」で人をのけ者にする意味である。「調」は「調弄」で、人をあざけりなぶるという

ことであり、つまり、「排調」とは「人をからかってやりこめる」という意味である。

排調第二十五44は、羲之の五番目の息子の王徽之の排調の言である。この言は郗家に大きな波を立てたようである。即ち、

郗司空の北府を拝するや、王黄門、郗の門に詣(いた)り、拝して云う、「応変の将略は、其の長ずる所に非ず」と。驟々(しばしば)之を詠じて已まず。郗倉、嘉賓に謂いて曰く、「公は今日拝す、子猷、言語殊に不遜なり。深く容す可からず」と。嘉賓曰く、「此は是れ陳寿が諸葛の評を作せるなり。人汝が家を以て武侯に比す、復た何の言う所あらん」と。とある。徽之が北府（徐州刺史）の拝命を受けたばかりの郗愔に「臨機応変という統率者としての才能は、あなたにはないし、得意とするところではない」とひどいことを言っている。これに対して郗愔の息子の郗融は兄の郗超に「徽之の言は誠に不遜千万だ、容赦できない」と言った。すると郗超は「彼の言は諸葛亮に対する評語だ。我々の父を諸葛亮になぞらえたのだから何の文句もない」と、至って冷静に受け止めている。郗超は感情的にならず、むしろ徽之の言を評価して彼の肩を持つような言い方である。これは北府を拝命した父に対してあまり乗り気でなかったということが心の底にあるからであろうか。本来ならば弟の郗融の気持を盛り上げるような発言が期待されたのではないだろうか。

劉孝標の注は『蜀志』の陳寿の評を引用して、「諸葛亮は、毎年軍を動かしたが、功を成さなかった。臨機応変の将才はその得意とするところではなかったのであろう」とある。郗超はこの陳寿の評について父のことをなぞらえたので理解し納得し、別に問題視しないで気持を素直に治めたのであろう。

次に、排調第二十五51について触れると、

二郗は道を奉じ、二何は仏を奉じ、皆財を以て賄う。謝中郎云う、「二郗は道に諂い、二何は仏に佞る」と。

とある。「二郗」は郗愔と郗曇の兄弟、「二何」は何充と何準の兄弟のことである。二郗は天師道を信奉していた。天師道は後漢の張道陵によって創始された道教の一派である。郗曇（320～361）は東晋の徐兗二州刺史を歴任し、没後、北中郎を追贈された。何充（292～346）は東晋の驃騎将軍、揚州刺史、録尚書事を歴任し、仏教の熱心な信奉者であった。何準は東晋の穆帝章皇后の父で、散騎郎に召されたが就かず、生涯仕官しなかった。謝万は謝安の弟で東晋の撫軍従事中郎、予州刺史、散騎常侍を歴任した。この小話の内容は、謝万が二郗と二何に文句をつけているのであるが、他人から見るとへつらいにもおもねりにも見えるのであろう。しかし、その道それぞれ為すこと為し、ゆるぎない実蹟をあげているのであるから、別に謝万が特別に言

い立てるほどのことでもないであろう。劉孝標の注は何充と何準について『晋陽秋』から引用して、「何充は、生来、仏道を好み、仏寺をあがめ営み、何百人もの僧に供養した。長く揚州におり、吏民を徴用して寺を作り、幾万となく寄進した。そのため遠近から譏られた。弟の何準もまた仏道に精進し、経を読み寺廟を営み治めた。」とある。

三

許詢（生没年不詳）は、字は玄度。幼時の字は訥。許允の玄孫。東晋の司徒掾に召されたが就任しなかった。清談の名手だったが夭折した。また、『世説』言語第二69の劉孝標の注は『続晋陽秋』から許詢について引用している。即ち、

許詢、字は玄度。高陽の人。魏の中領軍許允の玄孫である。幼いころから人並すぐれており、人々は神童だといった。成人してから、その人柄はいたって簡素で、司徒掾に召されたが就かずはやく卒した。

とある。

許詢と王羲之との『世説』での出会いは三話に見られる。即ち、

(1)　言語第二—69

(2)　品藻第九—55

(3)　規箴第一〇—20

である。

それでは、『世説』言語第二69から見ていくと、

劉真長　丹陽の尹為り。許玄度都に出でて劉に就きて宿す。牀帷新麗にして、飲食豊甘なり。許曰く、「若し此の処を保全すれば、殊に東山に勝らん」と。劉曰く、「卿若し吉凶の人に由るを知らば、吾安んぞ此を保たざるを得んや」と。王逸少坐に在りて曰く、「巣・許をして稷・契に遇わしむれば、当に此の言無かるべし」と。二人並びに愧ずる色有り。

とある。「巣」は巣父のことで、堯の時代の隠者である。山住まいし木の上に住居を作って寝ていたので巣父といわれる。堯が許由に天下を譲ろうとするのを聞いて、許由は耳の汚れであるとして潁川で耳を洗ったということを聞いて、巣父はまた水が汚れたと言ってその潁川を渡らなかったという。「許」は許由のことで、中国古代伝説上の隠者である。陽城槐里の人。字は武仲。沛沢に隠棲したが、堯が天下を譲ろうとするのを拒絶して箕山に隠れ、さらに九州の長としようとしていると聞いて潁水に耳を洗ったと伝えられる。「稷・契」は、古代の伝説で堯舜時代の名臣であった稷と契のことで、稷は名を棄といい、農業をつかさどって周の祖先となった。契は高辛氏の子、舜のとき司徒となり、夏の禹王を助けて洪水を治める功をたて、教育をつかさどり、殷に封ぜられて殷の祖先となった。

許詢が劉惔の生活をうらやましく思って発っした問いがこの小話の問題点となっている。それに答えて劉惔は、吉凶は家柄によるのではなく、人の行いによるのだということを強調している所はよいが、劉惔が得意になって自分のことを自慢しているのが醜くて気になる。そして、そこに居合わせた羲之が巣父と許由の故事を出して稷と契に会ったとしたら、こんな下世話な会話はないだろうと説くと、二人ともすぐにわかって恥じらいの様子を顔に出したという。これは羲之が一種の知識を何げなく示して二人の間をとりもったということになり、羲之の教養が光っている。

次は、品藻第九55である。即ち、

王右軍　許玄度に問う、「卿自ら言う、安石に何如」と。許未だ答えず。王因って曰く、「安石は故より相与に雄たらん。阿万は当に眼を裂きて争うべきか」と。

とある。羲之の問いかけに許詢は何も反応しないので、羲之が積極的に許詢に、謝安と比べてどうかと尋ねている。謝安なら君と肩を並べることのできる俊雄であるが、一方、弟の謝万はきっとまなじりを裂いて必死に君と争うにちがいないという羲之の意見である。許詢は謝安とは同等の力があり、謝万とは差があるという見方なのであろう。羲之はきっと許詢のことを親友の謝安と同等の力量、風格を見ていたのである。

謝万は感情をとかく表面に出す性格のようである。その問題点を具体的に前章に登場した郗超が、品藻第九49の中で指摘している。即ち、

謝万　寿春に敗れし後、簡文　郗超に問う、「万は自ずから敗る可し、那得乃ち爾く卒情を失える」と。超曰く、「伊卒任の情を以て知勇を区別せんと欲すればなり」と。

とある。歴史的にも重要な事項であるが、升平三年（三五九年）、西中郎、予州刺史だった謝万は、詔を奉じて燕の慕容儁と戦ったが寿春で敗北し、謝万は簡文帝に責められていた。謝万は自分勝手な感情で、部下の智力と勇気を判別しようとしたから失敗したのだと郗超は言っている。部下の信頼を失うこと、即ち敗北ということなのである。これがもし許詢だったらどうなっていたのであろうか。部下を上手に扱って勝利を導いていたのかもしれない。

次は、規箴第一〇である。「規箴」とは、人のあやまちを戒め、まちがいを正すという意味である。羲之が東晋の丹陽尹、尚書、呉興太子であった孔巖に戒められている規箴第一〇20を見ていくと、

王右軍は王敬仁・許玄度と並びに善し。二人亡き後、右軍論議を為すこと更に剋し。孔巖之を誡めて曰く、「明府は昔、王・許と周旋情有り。逝没の後に及んで慎終の好無きは、民

の取らざる所なり」と。右軍甚だ愧ず。

とある。東晋の著作郎、中軍司馬の王脩（334～357）と許詢への羲之の態度が、生前と没後とで厳しさが違いすぎるという孔巖の戒めである。この二人に対して生前はあれほど仲がよかったのに、没後は特に羲之は二人に厳しいというのである。亡き後は故人を哀悼する気持が見られないということは感心できないとはっきりと戒められたことに対して、羲之は大いに恥じたという。この「恥じた」ということで羲之の気持がよく理解できる。なお、孔巖の言う「慎終の好（よしみ）」とは、『論語』学而第一に見られる。即ち、

曾子曰、終を慎み遠きを追へば、民の徳厚きに帰す。

とある。羲之の態度に「終を慎む」二人への友情が感じられなかったのであろう。しかし、孔巖の戒めにより、羲之自身心からそのことを「恥じた」ということは、羲之の正直な態度がうかがえ、人間として生き抜いている姿そのものが感知できる。

四

次に、羲之が登場しない許詢の小話について見ていくと、先ず、言語第二73に劉惔の一言がある。即ち、

劉尹云う、「清風朗月には、輒ち玄度を思う」と。

とある。これは実に短く、単的な内容である。すがすがしい風が吹き、月の明るい夜にはきまって許詢のことを劉惔は思い出すという意である。これは許詢が清談に巧みであり、当時の人々にも評判が高く、「清風朗月」の時に劉惔と心ゆくまで論争したからであろうか。劉惔は簡文帝のサロンの中心人物で清談の名手であることはよく知られていた。許詢のいさぎよい清談のイメージが劉惔の気持と合致したのであろう。

なお、劉孝標の注は、『晋中興士人書』から引用して、「許詢清言を能くし、時の士人は皆彼を欽慕して之を仰愛す。」とある。

次に、文学第四38は、許詢の若い時の小話である。即ち、

許掾は年少の時、人以て王荀子に比す。許大いに平らかならず。時に諸人士及び林法師、並びに会稽の西寺に在りて講じ、王も亦たここに在り。許は意に甚だ忿り、便ち西寺に往きて王と理を論じ、共に優劣を決せんとす。苦だ相折挫し、王遂に大いに屈す。許は復た王の理を執り、王は許の理を執り、更々（こもごも）相覆疏するに、王復た屈す。許、支法師に謂いて曰く、「弟子の向（さき）の語は何にか似たる」と。支、従容として曰く、「君の語、佳なることは則ち佳なり。何ぞ相苦するに至るや。豈是れ理の中るを求むるの談ならんや」と。

とある。許詢は、東晋の著作郎で中軍司馬を歴任した王脩（334～357）と論争したり、比較されることが面白くなかった。ある

時、支遁（314～366）の仏典の講義の後に、王脩が同席していたので許詢は王脩と優劣を決めようとして議論したが王は屈した。そして、次には立場を変えて許が王の論理を用い、王が許の論理を用いて議論を進めたが、またしても許が勝ってしまった。それを聞いた支遁は許に対して、「どうしてあそこまで、しつこくやりこめたのか。あれでは論理の整合を目的とする清談の本旨に反する。」と戒めた。清談の大先輩である支遁にこのような意見を出させる程の、許詢の清談の内容は、いかに優れていたかがわかる。しかし、支遁に言わせれば過ぎたるは及ばざるが如しである。

また、次の文学第四40は、支遁と許詢の議論の優秀な点をとり上げている。即ち、

支道林・許掾の諸人、共に会稽王の斎頭に在り。支法師と為り、許、都講と為る。支、一義を通ずれば、四坐厭心せざるは莫く、許、一難を送れば、衆人抃舞せざるは莫し。但だ共に二家の美を嗟詠して、其の理の在る所を弁ぜず。

とある。支遁が仏法を講じ、許詢は都講即ちその場の代表質問者の役である。この二人の呼吸がうまく合って問題が解決されたので、そこに集まった人々は大満足し、二人の見事な議論に感歎したが、しかし、どちらが理にかなっていたのかは一同はわからなかったようである。きっと、支遁と許詢の二人の気持の盛り上がりに引き込まれ満足したのであろう。

次に、文学第四85であるが、

簡文、許掾を称して云う、「玄度の五言詩は、時人に妙絶すと謂う可し」と。

とある。許詢は文才に恵まれ文章をよくした。司馬相如、楊雄以来、賦や頌を尊び、『詩経』『楚辞』にならって百家の言を網羅したと、注として『続晋陽秋』から引用されている。さらに注は続いて、「晋が江南に移ってからは仏教が盛んになった。そこで郭璞の五言詩は、道家の言を集めて詠じ、許詢や孫綽はそれを受け継ぎ、さらに仏家三世の説を加えたので、『詩経』『楚辞』の体は途絶えてしまった。許と孫は共に当時の文壇の大御所であり、それ以後の作者はすべてこれにならった。」とある。即ち、許ははじめは基本として『詩経』や『楚辞』を学び、その風を身につけたのであろうが、道教や仏教が重んじられるという当時の時代の流れに従い、内容も形式も変わっていったのであろう。許の五言詩が当代の誰よりも素晴しいという簡文帝の見解であるが、これは多分仏教の理に叶った詩だったのであろう。このように許の詩を一人でも心から誉めてくれる人が存在したということは喜ばしいことである。

賞誉第八95は、許詢の才情は評判以上だと劉惔が誉めている小話である。即ち、

許玄度、母を送り、始めて都に出ず。人、劉尹に問う、「玄度は定めて聞く所に称うや不や」と。劉曰く、「才情は聞く所に過ぐ」と。

とある。もとより評判のよい許詢が、母を送って始めて都の建康に出たのを見て、ある人が劉惔に尋ねたのである。すると劉惔は評判以上であり、聞きしにまさると大いに誉めたのである。人間として立派であり、人徳のそなわった人物であるということである。

次の、賞誉第八144は、許詢と一夜を語り明かした簡文帝が、彼に対して感激し才と情を大いに誉めた小話である。即ち、

許掾嘗て簡文に詣る。爾の夜風恬かにして月朗るく、乃ち共に曲室中の語を作す。襟情の詠は、偏に是れ許の長ずる所なるも、辞寄清婉なること、平日に逾ゆる有り。簡文契素ありと雖も、此の遇尤も相咨嗟し、覚えず膝に造り、共に叉手して語り、将に旦ならんとするに達す。既にして曰く、「玄度の才情、故より未だ多くは有り易からず」と。

とある。許詢と簡文帝との出合いは、『世説』の中ではよくあるが、この夜は特別である。風は静かで月は晧々と輝き、奥の部屋で二人だけの空間ということで、環境的条件は整っていた。お互いに気持よく膝を交え、手をとりあって語り明かしたのであるから、さぞ二人とも満足したのであろう。そして、簡文帝から出た言葉が、「許詢の才情はありきたりのものではない」と心から感激している。二人の間はよほどよかったのであろう。語った許詢がよかったことも確かであるが、聞き手の簡文帝もよい耳を持っていたのであろう。

次の品藻第九50は、劉惔が少し変わった論法で謝尚と許詢を誉め、人物批評をしている。即ち、

劉尹、謝仁祖に謂いて曰く、「吾に四友有りて自り、門人親しみを加う」と。許玄度に謂いて曰く、「吾に由有りて自り、悪言耳に及ばず」と。二人皆受けて恨まず。

とある。これは、劉惔自身を孔子にたとえ、謝尚を顔回に、許詢を子路にたとえて論じている。それについては『尚書大伝』に次のような小話がある。即ち「孔子が言うには、文王に四人の友がいたという。顔回を得てから門人は一層親しくなったが、それは顔回が親しく付いていたからであろうか。また、子貢を得てからは遠方の士が来るようになったが、これは子貢が奔走したからであろうか。また、子張を得てからはすみずみに徳の誉れが伝わったが、それは子張が先後唱導したからであろうか。また、子路を得てから悪口が耳に入らなくなったが、それは子路があなどりを防いだからではないだろうか。」とある。門人が今までよりも一層親しくなったのは顔回、即ち、謝尚がいたからであり、悪口がお互いに入らなくなったのは子路、即ち、

許詢がいたからであるという、顔回を謝尚に、子路を許詢にそれぞれたとえた批評は、劉惔の見事な言い方である。しかもそれを聞いた二人は、その評を素直に受け入れて不満を示さなかったということである。多分、二人とも文王の友人であり孔子の高弟でもある顔回と子路に比されたので気分がよかったのであろう。

品藻第九54は、支遁が孫綽に許詢と比べてどうかと尋ねている。即ち、

支道林、孫興公に問う、「君は許掾に何如」と。孫曰く、「高情遠致は、弟子早已に服膺せり。一吟一詠は、許将に北面せんとす」と。

とある。許詢の高尚な情緒、幽遠な興趣という点では、わたしは前々から敬服するが、詩文に心を寄せることでは許詢はわたしに頭を下げるでしょうと、孫綽は自分の言いたいことを言って実にすっきりとしている。従って、「高情遠致」が許詢の評ということになる。しかし、詩文にはあまり才を示さなかったのであろうか。次の小話も似たような点に触れている。即ち、品藻第九61に

孫興公・許玄度は皆一時の名流なり。或いは許の高情を重んずれば、則ち孫の穢行を鄙とし、或いは孫の才藻を愛すれば、許に取る無し。

とある。孫も許も当時の名士であったが、許は高遠な心情を重んじ、孫は詩文の才を愛したが、許は詩文に関しては評価されなかったのである。

王羲之と関係のある郗愔の二つの小話は、直接的に郗愔について触れているということではなく、郗愔は比較の対象としての存在である。即ち、一話目は愴奴との比較、二話目は郗家の兄弟と謝家の兄弟との比較を羲之の妻の璿が述べている。羲之の直接の論ではなく璿の王家に対する批判に抗議が加えられ、妻としての気持がよく込められている。

郗愔については、品藻第九24の卞望之の郗愔への三矛盾の指摘である。即ち、

(1) 目上と目下に対しての態度の矛盾
(2) 自分には潔癖だが人にはごまかす矛盾
(3) 自分は読書好きであるが人の読書や学問には批判的で、いつも自分以下を望む矛盾

である。これらは誰にもありそうなことで反省の要点とすべきであろう。実は、郗愔のこの三矛盾を立証するような事件が、息子の郗超との間に起っている。即ち、大司馬桓温の幕下として郗超の立場が優先され、結果的には父の郗愔への裏切りとなった手紙の書き変え事件と、郗超の不慮の早世である。親よ

り先きに逝くことこそこの上ない親不孝者である。また、死因として考えられる一つに桓温の謀反が上げられる。父郗愔は王室に忠誠であったからその件は何も知らせられなかったが、死の直前に作った父への小さな文箱には、桓温からの密書が詰っていた。郗愔はこれを見て息子のことを「あんな奴はもっと早く死ねばよかったのだ」と激怒した。悲劇中の悲劇であるが、これは父の本心から出た言葉だったのでろうか。

許詢と羲之の出会いは三話である。言語第二69は、羲之が巣父と許由の徳の深さについての古い内容を述べ、教養のある所を劉惔と許詢に示して納得させた小話である。

次の品藻第九55は、許詢が謝万よりも謝安と肩を並べられる程の俊雄があるという羲之の許詢に対する論である。羲之は許詢のことを親友の謝安と同等の力量、風格のある人物と目していたのである。

三つ目の規箴第一〇20では、羲之の王脩と許詢への態度が、生前と没後で厳しさが違いすぎるという東晋の丹陽尹、尚書、呉興太子を歴任した孔巖の戒めである。生前は二人に対してあれほど仲がよかったのに、没後は特に厳しいということは、故人を哀悼する気持が薄いという率直な戒であるが、羲之はこれに対して「恥じた」と素直に認めている所は爽やかである。

また、羲之とは無関係の小話に許詢の人柄を論じている所がある。即ち、「清風朗月の時に許詢を思う。」という劉惔のすがすがしい一言があり、また、王脩との論争や講義の優劣や、清談の本旨についての支遁の戒めなども、結局は許詢の清談の優秀さから生み出されている。さらに、許詢は五言詩についても時人に絶妙と称され、劉惔が「許の才情は評判以上だ」と絶賛している。また、許詢と一夜を語り明かした簡文帝は、許に対して感激しその才情と輝きを誉めている。そして、孫綽は許詢のことを「高情遠致」の四字句でまとめている。

以上のように、個性的で才気の溢れた郗愔と許詢は、それぞれの人徳をもってこの厳しい戦乱の世を、自分なりに、自分を信じて生き抜き、そして、生かされている。本稿の中心は羲之であり羲之と二人との係わりを把握するのが必修であったが、今回は特に羲之よりも郗・許の二人のほうが前面に力強く突出している感が強い。また、王家と郗家との違いについて、或は郗愔と郗超父子との戦場での一種の生々しいドラマを思わせる場面は、本稿の一つの特徴として位置付けられる。今後もこのシリーズを通して羲之の生き方を中心に広く深く探求していきたい。

（付記）

さて、この度、本稿をまとめるに当り、次の書籍を参照させて頂きました。最後になりましたがここに記して謝意を標します。

世話新語（上・中・下）　日加田　誠著　明治書院
世話新語（上・下）　竹田　晃著　学習研究社
世説新語　森　三樹三郎訳　平凡社
世説新語と六朝文学　大矢根文次郎著　早大出版部
晋書　中華書局
晋書（和刻本正史）　汲古書院
王羲之　中田勇次郎著　講談社
王羲之　吉川　忠夫著　清水書院
中国人の機智　井波　律子著　中公新書
書苑彷徨　杉村　邦彦著　二玄社
書論（第二十八・三十一号）　書論編集室
王羲之伝　森野　繁夫著　白帝社
王羲之全書翰　森野繁夫・佐藤利行著　白帝社
中国書法史を学ぶ人のために　杉村邦彦編　世界思想社
中国思想辞典　日原利国編　研文出版
辭源（正続編合訂本）　商務印書館
中國人名大辭典　泰興書局印行
書道芸術（王羲之・王献之）　中央公論社
書道全集　平凡社
中国書道史の10人（「墨」スペシャル28号）　芸術新聞社

（人文学部日本文学科教授）